

「駒澤大学心理学論集」発刊にあたって

小野 浩一

On publication of “Komazawa Annual Report of Psychology”

Koichi Ono (Chairman of the Department of Psychology)

21世紀を間近に控えた1998年4月、駒澤大学文学部に心理学科が誕生し、ここに心理学科紀要、「駒澤大学心理学論集」第1号を発刊する運びとなった。心理学科成立までの来し方、そしてこれからの発展の行く末を思うとき、ひととき深い感慨を覚えるのは私だけではないであろう。

駒澤大学における心理学の研究および教育の歴史はおおよそ30年前に遡る。まず、昭和43年に大学院の心理学専攻修士課程が設置され、そして、45年に大学院の博士課程が認可された。学部教育としては昭和44年に心理学コースが開設されたのであるが、それは正式に認可されたものではなく、社会科学の中の一つのコースとして位置づけられたものであった。その後、心理学の研究教育体制の整備が図られてゆく中で、心理学コースを専攻あるいは学科にしようとする機運が盛り上がり、過去に2度、具体的に準備が進められたことがあったが、諸般の事情によりその計画は実現しなかった。今回ようやく3度目にして、念願がかなったわけであるが、今日まで心理学研究室を支えてこられた先生方の粘り強い熱意と大学当局の的確な判断と実行力、さらに、心理学科の母体である社会科学の先生方の力強い励ましとバックアップなど多くの方々力が結集されて、今回の心理学科設立に到ったことを忘れることはできない。

心理学科の概要は、まず、教員スタッフは6名の専任教員と助手、および24名の非常勤教員の構成である。2つの建物にそれぞれ7室と10室計17室の実験研究施設を有し、過去30年間に蓄積された図書、雑誌類も豊富である。昨年4月、71名の第一期生が入学した。教育カリキュラムは、「心理学科」の名称にふさわしいように、実証科学としての心理学のオーソドックスな方法を基盤として、さまざまな実験科目や少人数制の演習、実習科目を設置し、心理学の基礎から応用・臨床分野まで段階的かつ体系的に学べるよう整備した。

新しい学科としてのスタートは、これまでとはまた違った社会的責任を求められることになるであろう。研究機関としての一層の充実とレベルアップを図るよう努力し、時代の趨勢に即した新しい伝統を築きあげて行かなければならない。また、教育機関として専門的職業教育を含めたさまざまなニーズに的確に応え、質の高い教育を提供してゆかなければならない。確かに、ここ数年心理学に対する社会的需要が高まり、それを反映してか学部においてもまた大学院においても入学志願者は増加している。しかし、そうした社会的要請に対する心理学者や大学の対応は未だ十分なものとは言えないように思う。このようなときにこそ身を引き締めて、さらなる改革と前進への模索を心がけなければならないのではないだろうか。「駒澤大学心理学論集」は、これから行われるであろう駒澤大学心理学科の諸々の活動を社会にモニターする一つの媒体である。そこに一つ一つ新たな足跡が刻み込まれて行くことになるだろう。

この度刊行される第1号は、研究論文と「駒澤大学心理学研究室30年の歩み」に関する特別記事の2部構成になっている。学長雨宮真也先生からは励ましの巻頭言をいただき、また、「歩み」では28年にわたって心理学研究室の発展に尽くしてこられた中村昭之先生（現在本学名誉教授）と30年前の設立当初、中心になって準備を進められた松本博基先生（元山口女子大学教授）に貴重な玉稿をいただくことができた。また、今回の紀要第1号の発行に当たっては、私たちの同僚である寺岡隆教授が編集委員長として、長年の経験と情熱を傾注して陣頭指揮をとってくださった。こうして発行される運びとなった「駒澤大学心理学論集」を今後暖かく見守ってくださり、折に触れてご意見やご教示をいただければ幸いである。